



<連載(104)>

スーパースター・カプリコーン の台湾クルーズ



大阪府立大学海洋システム工学科教授

池田 良穂

マレーシア 資本のクルーズ運航会社スタークルーズが、ついに日本の近海でのクルーズを開始した。船は2万8千トンの「スーパースター・カプリコーン」。旅客定員は1300名のクルーズ客船で、その前身はロイヤル・バイキング・ラインの高級クルーズ客船「ロイヤル・バイキング・スカイ」。大改装をして、2人用キャビン、3人や4人用に改装して、大幅に旅客定員を増加させた結果、カリブ海の大衆クルーズ並みの料金設定を可能とした。

さっそくその「スーパースター・カプリコーン」の沖縄起点の第1航に乗船してみた。

関西空港を全日空機で飛び立つと、沖縄の那覇までわずか2時間である。空港に降り立つと、その足で那覇新港のターミナルにタクシーで向かう。那覇新港は、フェリーや貨物船の一大基地になっており、これから毎週2回定期的に寄港するスーパースター・カプリコーンもその一画から出港することとなる。

受け付けは出港の3時間前から行なってお

り、ターミナルの前には制服姿の同船の船員が待機していて案内にあたってくれる。ターミナル内のカウンターでパスポート等を預けてキャビンの鍵をもらい、マイクロバスで船まで送ってもらう。いよいよ乗船である。

乗船 してみると、船内は意外に閑散としていた。これは乗客のほとんどが沖縄観光に出払っているからで、那覇からの乗船する日本人客の数はごくわずかなためとわかった。それでも、船内の各公室では、フィリピン人や中国人のサービス要員が笑顔で迎えてくれる。

この「スーパースター・カプリコーン」のクルーズは、日本の旅行代理店では、沖縄発着クルーズとして販売しているが、実は台湾の基隆が起点と言う方が正確で、乗客も大多数が台湾の中国人である。この第1航には、台湾から600名の乗客が乗っており、那覇から乗船した日本人はわずかに30名であった。

船内のサービスは、カリブ海の本格的なクルーズとほとんど変わらない。3食の食事以外

にも、モーニング・コーヒー、アフタヌーン・ティ、ミットナイト・ブュフェなどなど、ほとんど一日中、船の中のどこかで食事や飲み物がサービスされている。もちろん、食事はすべてクルーズ料金の中に含まれているから、乗客はアルコール類やソフトドリンクを頼んだ時だけお金を払うだけである。

食事は、テーブルでのサービスのあるダイニングルームでのものと、デッキまたはラウンジのブュフェ式のもの、自由を選ぶことができる。メニューも多彩で、フランス料理から中華料理、さらには日本料理まで用意されているので、日本食しかだめな人でもOKである。

船上の イベントについては、ほとんど毎日どこかの港に寄港するので、昼間のイベントは少ないが、夜になるとダンスタイム、ディスコ、ショー、カクテルパーティ、カジノ、カラオケと楽しみは多い。第1航目ということもあってショーなどにまだ未熟な所も見えるが、これも次第に改善されていくことであろう。

寄港地としては、4泊クルーズでは、那覇を出た後、台湾の基隆、石垣島、座間味島により、それぞれオプションツアーが用意されている。特に、座間味は那覇からフェリーで4時間ほどの離島だが、海の美しいことでは定評があり、ダイビングのメッカともなっている。この島の沖で船は錨を下ろし、テンドーボートで島に上陸し、島内の観光、マリンレジャーなどを楽しむことができる。なかなか行く機会のない離島だけに、これがこのクルーズの目玉のひ

とつとなっている。

この充実したクルーズが、4泊5日及び3泊4日のクルーズともに5万円からであるから、一日あたり1万円からということになる。この国民宿舎並みの料金でグレードの高い船旅ができるという、絶対にお買い得なレジャーだと言え、台湾で人気が出ているわけもよく分かる。漸く、日本の近海にもカリブ海クルーズと同様のリーズナブルプライスで、かつグレードの高いサービスのクルーズ客船が姿を現わしたことは、日本の船社の実施する高級クルーズとの相乗効果によって日本のクルーズマーケットの一気に成長させる可能性を持っていると言えよう。

同クルーズの詳細は、スタークルーズの日本支社である日本スタークルーズにお問い合わせ頂きたい。



24時間営業の展望ラウンジではクラシック音楽も楽しめる「スーパースター・カプリコーン」